

私の「平和観」

長崎県立長崎東高等学校

二階堂 杏

毎年八月になると「平和」について、何となく考える。テレビは戦争に関するドラマなどを放送し、学校では平和についての作文を書いたりすることで、「平和」という概念を再考することになる。そこで、八月になると私も「平和」について考える。「平和」とはどのような状態なのだろうか。平和な状態とは、戦争がないこと、核兵器がないことなどと、さまざまに「ないこと」が頭に浮かんでくるが、そのどれもが決定的なものではない。「戦争がなく」でも「平和ではない」と感じる人もいるだろうし、「紛争中」でも「平和」だと思っている人もいるだろう。そして、「核兵器がなくなる」というのは「戦闘機がなくなる」、「大陸間弾道ミサイルがなくなる」というのと変わるところはなく、つまり兵器が種類なくなるだけであって、それがイコール平和というわけではないのだろう。なぜなら、その兵器の使用が禁止されたとしても、違う兵器が生み出され、そしてその兵器が紛争、戦争に使われるからだ。

確かに、太平洋戦争中の東京大空襲では、多くの爆弾によって数百万人の罹災者を生み、広島と長崎では原子爆弾が落とされ多くの人命が奪われた。特に原子爆弾は、その瞬間だけでなく、戦後にも放射能の影響を多く

残した。しかし第二次世界大戦の終結によって、この世界から紛争・戦争がなくなったわけではない。第二次世界大戦以降も、世界中のいたるところで紛争・戦争が起こり、そして、現在進行形で起こっているのだ。一九七三年にはアラブ諸国で世界中の経済を巻き込んだ中東戦争が起こり、アフリカのルワンダでは民族紛争による大量虐殺が起こり、ミャンマーではいくつもの民族が民族間で紛争を続け、数十万人の難民を生み出している。「原子爆弾」や「大陸間弾道ミサイル」などといった種類の兵器がなくなったところでこのような紛争がなくなるとは思えない。なぜならこれらの紛争は、大型の爆弾を使用しているものではないからだ。兵器があるから紛争や戦争をしようと思える人はいないだろう。紛争や戦争を起こす理由があつて、そして理由を持つ人たちは、そこに兵器があるから使用しようと思えるのだろう。

平和な状態というのは「兵器の強弱」や「兵器の有無」、「憲法」によって保証されるものではない。平和という状況は、人間一人ひとりの争いのない状態でありたいという強い願い、希望、祈り、そして何よりも平和な状態を保とうとする不断の努力によって保証されるものなのだ。紛争状態・戦争状態においてお互いがお互いを傷つけ合っている状態であっても彼らは等しく自分達こそが正義、相手が悪だと考え行動しているのだろう。

しかし、どちらの立場の人間であっても、「人の命は一つしかない」「人の命は重要なものだ」という認識には変わりはない。そうであれば、世界中の人間一人ひとりが小さな声で「命は一つしかなく、重要なものである」と声を出し続けることは、今現在の世界をすぐに変える事はできなくとも、次世代、次々世代の世界を変えることができるかもしれない。少なくとも私はそうなることを期待して、小さな声を出していきたい。